

立琴と歌の調べに合わせて、 主である王の御前で喜び叫べ

これは「聖書の音楽」についての論文ではない。礼拝音楽のあり方について取り扱うわけでも、どのようなジャンルの音楽が聖書的であるのかということについて研究したわけでもない。それらの研究も大切であるが、まずは聖書の中ででてる音楽は何かを考えなければならない。日々、聖書を読み、詩篇を学んでいると気が付くように、「主をほめたたえよ」「主に感謝せよ」という言い方が何度も繰り返される。また詩篇の中では角笛、琴、タンバリン、シンバルなどの楽器を使って賛美するようにとも命令されている。聖書全体には音、音楽、賛美などが溢れているのである。

聖書の音楽について5つの章に分けて取り扱う。

1. 契約の音

音楽の源である神の発せられる音とはどのようなものか。またその音の意味は何か。

2. 音と楽器

神の民はどのような音を発するのか。聖書にでてくる楽器の意味は何か。

3. ヨハネの黙示録での成就

ヨハネの黙示録において音や音楽はどのような形で成就しているのか。

4. 新しい歌

聖書にでてくる賛美のひとつ、「新しい歌」とはどのような歌なのか。何を賛美しているのか。どのような時に歌うのか。

5. 主の恵みはとこしえまで

「主に感謝せよ。主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで」とはどのような賛美なのか。

著者: 菅野契也

1988年3月生まれ。6歳の時から聖書家庭教育で詩篇を学ぶ。週にひとつの詩篇に取り組み、今は第4回目です。都上りの歌を研究中。また福音総合研究所の各種セミナーには9歳の時に「山上の説教」に初参加。今までに50コースほどを受講。趣味でクラシックギター（六弦の琴）をたしなむ。兄弟とのアンサンブル名は、
el Sonido del Cielo。

1. 契約の音

神が音を発することの意味は何か

「万軍の主は、雷と地震と大きな音をもって、つむじ風と暴風と焼き尽くす火の炎をもって、あなたを訪れる。」(イザ29:6)

神は音と火と風を持って民の所に来られると言われているが、何をなさるために来られるのだろうか。神が音をもって訪れるとはどのような意味なのだろうか。

創造の時の音

神の音について考える時に、最初に音が発せられた箇所を見なければならない。直接「音」という言葉はでてこないが、神の言葉による7日間の創造には、音を連想させることがある。「神が『光よ。あれ。』と仰せられた。すると光ができた。」(創1:3)とあるように、神は、声によって創造された。またその声によってさばきをなし、創造されたものを「よしと見られた」(創1:4, 10, 12, 18, 21, 25, 31)のである。

墮落直後の音 [創世記3:8]

直接、「音」という言葉が使われるのは、最初の墮落直後である。人間は「神である主の音(注1)を聞いた。それで人とその妻は、神である主の御顔を避けて園の木の間に身を隠した。」(創3:8)アダムとエバが恐れて隠れるほどの音とはどのようなものだったのだろうか。

ノアの洪水の音 (創世記6-9)

神の持つておられる声、音は、「雷」(IIサム22:14など)、または「大水」(エレ51:55など)のようであると表現される。歴史の中で、最初に、雷と大水があったのはノアの時代である。神の子たちであるセツの子孫が墮落し、人の娘であるカインの子孫と結婚したので、神は洪水によってさばきをなされる。このさばきの中で生き残ったのは、主の命令を守ったノアの家族8人だけであった。それで、「神は、ノアと、箱船の中に彼と一緒にいたすべての獣や、すべての家畜とを心に留めておられた。」(創8:1)神は、雷と大水による大きなさばき、全世界が創造前の状態に戻されてしまう中にあっても契約を破ることはせず、ノアと契約を新たにしてください。

イサクを捧げる時の音 (創世記22:1-19)

神は、アブラハムの時代にも天からの音を響かせられた。神は「あなたの子、あなたの愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。そしてわたしがあなたに示す一つの山の上で、全焼のいけにえとしてイサクをわたしにささげなさい。」(創22:2)とアブラハ

注1 新改訳では「声」という言葉に翻訳されているが、普通の「音」とも訳せるヘブル語である。

ムに語り、彼を試された。忠実であったアブラハムは、命令通りに捧げようと、まさに殺そうとした時、天からの「アブラハム。アブラハム」という声を聞く。その後も神はアブラハムに直接語って下さり、アブラハムを祝福して下さった。アブラハムが、与えられた契約が守られないかもしれないという状態に置かれても、命令に従うことを見てくださった神は、アブラハムの子孫を増やすことを天から直接約束してくださるのである。

十戒が与えられる時の音(出エジプト記19:16-19, 20:18-21)

神はエジプトから出たイスラエルの民に対してご自分を表す時にも音を使われた。神が民に十戒を与えてくださるため、シナイ山に降りてこられた時、神は栄光の雲を通してご自分を表し、「山の上に雷といわずまと密雲があり、角笛の音が非常に高く鳴り響いたので、宿営の中の民はみな震え上がった。」(出19:16)その音は、栄光の雲の中にあるケルビムの羽ばたきによる大きなどろきであった(エゼ1:24, 2:12, 13)。また神ご自身もその中で語られるのであった(出19:18、エゼ1:28, 2:1)。

モーセに対する音

神は特にモーセに対して何度もご自分を表し、直接話された(民12:8)。神が最初にモーセに語られた時、神は燃える柴として表れ、そこから語られた(出3:1-4:17)。また神がもう一度十戒を与え、契約を結んでくださった時も、直接、御名によって「主、主は、あわれみ深く、情け深い神、怒るのにおそく、恵みとまことに富み、恵みを千代も保ち、咎とそむきと罪を赦す者、罰すべき者は必ず罰して報いる者。父の咎は子に、子の子に、三代に、四代に」(出34:6, 7)と宣言し、ご自分が契約を絶対に破ることがないことを誓ってくださった。

サムエルの時代の音

祭司の契約と王の契約の過渡期のリーダー、サムエルは民を集め、契約を思い出させることがあったが、2度とも神は雷を閃かせられた。最初に民を集めて罪をさばき、悔い改めていた時には、ペリシテ人の攻撃を受けた。しかし、サムエルが叫んだ時に、主は大きな雷鳴をとどろかせたので、イスラエル人は勝利することができた(1サム7:10)。次に民が集まった時は、サウルが王になった直後であった。そこでサムエルは主に従うようにと命じ、御声に聞き従わないならさばきを行うと宣告する。すると神はサムエルが言った通りに雷と雨をすぐに下された(1サム12章)。それで民はとても恐れた。神は、民と契約を結ぶ時に、音によってご自分を表されるのである。

神殿建設後

モーセが幕屋を建て終えた時も(出40章)、ソロモンが神殿を建て終えた時も(1列8章、II歴7章)、神はその神殿、幕屋をご自分の栄光で満たして下さった。この栄光はイスラエルが荒野を歩いた時に導き、シナイ山の上に表れたものであり、また、エゼキエルが中に入

り、エゼキエルの幻にでてきた神殿を満たした栄光の雲と同じである。それで、栄光の雲から音がでていたことは、直接、モーセの箇所、ソロモンの箇所には書かれていないが、響き渡っていたことは考えられる。また、シナイ山で十戒が与えられた時のように、ソロモンの時代にはダビデの作った楽器が鳴り響いていたので、大きな音があった。

主イエス・キリストにまつわる音

主イエス・キリストご自身の生涯の中にも興味深い音がある。最初にバプテスマを受けた時に、神は天から「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ」(マタ3:17、マコ1:11、ルカ3:22)と宣言される。

またエルサレムに入城された時にも、主イエス・キリストが「御名の栄光を現してください」と願うと、御父が「わたしは栄光をすでに現したし、またもう一度栄光を現そう」と言われる(ヨハ12:28)。その音は、聞いていた者たちが雷の音かと思うほどの音であった。

最後に主イエス・キリストは、十字架に架かって、たましいが取り去られる直前に大声で叫ばれた(マタ27:50、マコ15:37、ルカ23:46)。すると神殿の幕が避け、地震が起きた。このように主イエス・キリストは音によってもご自分と御父の契約関係を表された。また「言葉」(ヨハ1章)としてイスラエルの民に契約のさばきをなされたのである。

契約と音

これらの箇所を見てくると明らかになるのは、主が声を発せられる時には契約が結ばれたり、契約が新たにされたりするということである。神はご自分の民に与えられた契約に基づいてさばきをなし、ご自分の契約を守るアブラハムなどには天からの声で祝福や、契約の約束を与えられる。しかし、ご自分の契約を守らない者には天からさばきを宣告し、雷、大水などによってさばきをなされるのである。そのために罪を犯した者は大きな音を聞いた時に恐れるのである。そのように神が声を発せられることによってご自分の栄光を表して下さるのである。

2. 音と楽器

民の発する音はどのようなものか

神はさばきの時、そして神の民と契約を結ばれる時に音を発せられるが、それに対して神の似姿であり、民である人間はどのような音で応答するのだろうか。

最初の音楽ユバル

カインの7代目の子孫であるユバルは立琴と笛を巧みに演奏することができたと記されている(創4:21)。神は人間を「ご自身のかたちに創造された」(創1:27)ので、神が天から大きな音を出されるように、私たちも賛美をし、音楽を演奏する者とされたのである。私たちが歌い、また楽器を演奏する時に神の似姿としてふさわしい者とならなければならない。

ミリヤムの歌

聖書の中で大切な賛美のひとつは、モーセによって導かれたイスラエルの民が、エジプトから脱出し、海を渡ったあとの歌である(出15章)。この箇所から、楽器を使った賛美がどのようなものかを知ることができる。モーセとイスラエルの民が一緒に主の奇跡的な救いを賛美すると、モーセの姉ミリヤムと女性たちはタンバリンを使い、「主に向かって歌え。主は輝かしくも勝利を収められ、馬と乗り手を海の中に投げ込まれた」と賛美する(出15:21)。

タンバリンの音

ミリヤムが使ったタンバリンは、敵に対する勝利を喜ぶ女性が、踊りながら賛美するために使ったものである。士師のひとりであったエフタが、アモン人に勝利した時、エフタの娘はタンバリンを持って勝利した父を喜んで迎える。(士11章)。またダビデがゴリヤテを殺したことによって、イスラエルの民がペリシテ人に対して勝利した時にも、女性たちはタンバリン、琴などを持って踊りながら、「サウルは千を打ち、ダビデは万を打った」(Iサム18:7)と歌い、戻ってきた軍を迎える。

ダビデの琴

サウルが主の命令に逆らい、さばきの宣告を受けた時から、悪い霊がサウルに臨むようになった。その時以降、琴を演奏することにおいて長けていたダビデは、「神からの悪い霊がサウルに臨むたびに、ダビデは立琴を手にとって」演奏した。それによって「サウルは元気を回復して、良くなり、悪い霊は彼から離れた」ためである(Iサム16:23)。音楽は狂った人から悪い霊を取り除くためにも使われたことをこの箇所から見ることができる。

ダビデの賛美制度

ダビデは、サウルがペリシテ人によって殺されたあとにイスラエルの王となる。ダビデが王座に着いて最初にしたことは、契約の箱をダビデの町に運び込むことであった(IIサム6章、I歴16章)。その時にダビデはレビ

人を集め、それぞれに担当を与えて、十弦の琴、ラッパ、シンバルなどの楽器を使って「まことに主の恵みは、とこしえまで」と賛美させた(I歴16:41)。この役割分担は代々、ユダの王たちによって続けて行われた。それは、「ダビデおよび王の先見者ガド、預言者ナタン、の命令のとおり、レビ人にシンバルと十弦の琴と立琴を持たせて、主の宮に立たせた。この命令は主から出たものであり、その預言者たちを通して与えられたものだからである。」(II歴29:25)ソロモンは神殿を建設した時に、ダビデが命じた通りに行き、楽器を使って主を賛美した(I列8章、II歴7章)。同じようにバビロンから戻ってきたユダヤ人も、新しい神殿の定礎の時に楽器を使って大声で賛美した(エズ3章)。その賛美はとて大きく、遠い所でも聞こえたほどであった。ソロモンの時にも、エズラ、ネヘミヤの時にも主の栄光の雲が神殿を満たした。他にも、主の目になかったユダの王ヒゼキヤ、ヨシヤなどは神殿を清め、そこで祭りを行って、楽器を用いて賛美するように命じた(II歴29章、35章)。

ラッパ、角笛の音

ラッパ、角笛などは戦争の時に使われることもある。モーセはイスラエルの民が行動する時には、主の命令によって作った銀のラッパによって合図をした(民10章)。ヨシュアの時代には、祭司たちがエリコの町の周りを、角笛を吹き鳴らしながら歩いた(ヨシ6章)。さらに士師のひとりギデオンは、ミデヤンに対して戦った時に、角笛とつぼを使って音を出し、「主の剣、ギデオンの剣だ」(士7:20)と叫んで、敵の混乱を招いた(士7章)。イスラエルの民が「主の剣」として戦う時には角笛が吹き鳴らされたのである。

角笛についての箇所興味深いのは、神が荒野にいる民の所に降りて来られた時である。その時に主は栄光の雲から音を出されたが、同時に民も角笛を吹いて、その雷のような音に応答したのである(出19章)。

シンバルの音

シンバルという楽器はダビデによってアサフの家族に割り当てられたものであった。詩篇150篇で「シンバル」という言葉が使われているが、この原語は申命記28:42では、「こおろぎ」と翻訳されている。このことからシンバルについて考える時はエゼキエルが見た幻を連想しなければならない。エゼキエルが見ていた幻の中にでてきた雲の中には翼を持っていた4つの生き物がいたが、その翼が大水の轟きのような音、軍の騒音のようであった(エゼ1章)。シンバルは、ケルビムの翼がぶつかり合う音を表しているのである。

主の音を表すもの

なぜ、神は「立琴をもって、主に感謝せよ。十弦の琴をもって、ほめ歌を歌え。…喜びの叫びとともに、巧みに言をかき鳴らせ」(詩33:2, 3)と命じ、「角笛を吹き鳴らして、神をほめたたえよ。十弦の琴と立琴をかなでて、神をほめたたえよ。タンバリンと踊りをもって、神をほめたたえよ。緒琴と笛とで、神をほめたたえよ。音の高い

シンバルで、神をほめたたえよ。鳴り響くシンバルで、神をほめたたえよ」(詩150:3-5)などと呼びかけておられるのだろうか。このことはこれらの楽器が何を表しているのかを見ると分かる。ヨハネの黙示録にはたくさんの音についての表現、主への賛美がでてくるが、その中で主の声は「ラッパの音のような大きな音」と表現され(黙1:10)、小羊によって贖われた144000人の人々による賛美は「立琴をひく人々が立琴をかき鳴らしている音のようでもあった」(黙14:2)とある。天にいる御使いも、民も、神の前で、神と同じような音を出していたのである。イスラエルが使っていた楽器に共通しているのは大きな音を出し、雷、大水のような音がでるものだったということである。

天の民であること

イスラエルの民によって使われていたラッパ、琴、シンバルなどはすべて神の音を表し、神の契約の音に対して応答するために使われていた。このことによって民は自分たちが天にいる民であることを表す。神は契約の箱に座し、私たちの王の王、大祭司として私たちを治められるので、私たちはその民として神に賛美を捧げる。いつも主をほめたたえていることによって、私たちはこの世にいる王の民、祭司の民として全世界に影響を与えるのである。

3. ヨハネの黙示録での成就

どのように成就しているのか

ヨハネの黙示録は、聖書全体で預言されていることの成就である。当然、音、賛美、楽器についての成就もある。では、どのような形で成就しているのだろうか。

神のラッパのような声

この書物は1章から音で満ちあふれている。ヨハネは主イエス・キリストの代表として7つの教会に手紙を書いている。最初にヨハネは神を見るが、その方は栄光に満ちあふれ、光り輝いていた。またラッパのような声、大水の音のような声で話されていた。まず神が大きな音を発せられていたということから、賛美と音に満ちあふれるヨハネの黙示録が始まるのである。

ケルビムの賛美

最初の賛美はヨハネが主の御座の前に行った時にある(黙4章)。そこで賛美していたのは、エゼキエルが幻で見た4つの生き物に似たものであった。「御座の前は、水晶に似たガラスの海のようにであった。御座の中央と御座の回りに、前もうしろも目で満ちた四つの生き物がいた。第一の生き物は、ししのようであり、第二の生き物は雄牛のようであり、第三の生き物は人間のような顔を持ち、第四の生き物は空飛ぶわしのようであった。この四つの生き物には、それぞれ六つの翼があり、その回りも内側も目で満ちていた。彼らは、昼も夜も絶え間なく叫び続けた。」(黙4:6-8)その翼は「大水のとどろき」、「全能者の声」、「陣営の騒音」のようであったが(エゼ1:24)、その声も「雷のよう」(黙6:1)であった。

24人の長老の賛美

その4つの生き物と一緒に賛美していたのは24人の長老たちである。その人たちはヨハネの黙示録の中で、何度か神を賛美する者としてでてくる。この24という数字を聞いた時に思い出さなければならないのは、ダビデの制定した賛美の制度である。ダビデは「彼らおよび主にささげる歌の訓練を受けた彼らの同族・・・二百八十八人」を(1歴25:7)、12人ずつ24組に分けた。「この人々は歌うたいであって・・・、昼となく夜となく彼らはその仕事に携わった」(1歴9:33)者たちである。このレビ人たちがイスラエルの民の代表として神に賛美していたように、長老たちも全世界の民、さらには御使いたちの代表として「聖徒たちの祈り」を神に捧げた(黙5:8)。

多くの御使いの賛美

ダニエル書で封印されたものが小羊によって解かれる時にも4つの生き物、長老たちは賛美していたが、その周りで多くの御使いたちも大声で賛美していた。その御使いたちの数は「万の幾万倍、千の幾千倍」(黙5:11)であったので、とても大きな声を出していた。

すべての被造物の賛美

さらにまた「天と地と、地の下と、海の上のあらゆる造られたもの、およびその中にある生き物」(黙5:13)、つまりすべての被造物までもが神を賛美していた。「息のあるものはみな、主をほめたたえている」(詩150:6)のである。

しゅろの枝を持った民の賛美

ダニエル書で封印された封印の5つ目が解かれた時(黙6章)、神はご自分のために殺された聖徒たちに白い衣を与えてくださった。その者たちは御座と小羊の前に立って賛美をしていたが、その手にはしゅろの枝があった。このことは主イエス・キリストがエルサレムに入城した時の人々の反応とつながる(マタ21:4-9、マコ11:7-10、ルカ19:35-38、ヨハ12:12-15)。彼らは大声で叫び、主イエス・キリストの入城を喜んだが、本当にイスラエルを救う王であるということを完全に理解していたわけではなかった。しかし、ヨハネの黙示録において同じ賛美をする時に、主イエス・キリストこそメサイアであることが分かって、歌っているのである。

144000人の賛美

14章で、さばきが行われる前に、神はご自分の贖う者144000人に印を押される。その人たちは、イスラエルの12部族から12000人ずつ選ばれた者であった。その者たちは小羊がシオンにおられる時に一緒にいて、新しい歌を歌っていたが、その声は「大水の音のようで、また、激しい雷鳴のようであった。」それと並行しているのが、「立琴をかき鳴らしている音」(黙14:2)である。立琴を使って賛美するということも大きな大水の音、雷の音を表すのである。

モーセの歌と小羊の歌

立琴を使って賛美している歌は「モーセの歌と小羊の歌」(黙15章)である。神の民を惑わす竜や獣に勝った者たちはその歌を歌っていた。そこで歌われているのは、神が全世界の王、さらには万物の支配者である方であり、聖なるお方だということである。

新しい歌、主の祈りとつながり

ケルビム、長老、御使い、贖われた者たちなどは何を賛美しているのだろうか。彼らは「新しい歌」を賛美し、神が力、栄光、支配、権威、賛美、知恵を持つのにふさわしい方であると歌っていた。また大淫婦がさばかれたあとには主がさばきをなされたことを歌っている。モーセの歌と小羊の歌では主が王であることを歌っている。これらの賛美は主イエス・キリストによってまとめられている。私たちがいつも祈っている「主の祈り」(マタ6章)はヨハネの黙示録の賛美そのものである。まず「天にいます父よ」と呼びかけ、神の御名があがめられること、王の王によって全世界が支配され、御国が来ること、みこころによるさばきが行われること、そして、日々の養いと、罪からの贖い、悪からの救いを祈る。最後に、御国、力、栄光は永遠に神のものであるという賛美をし

て終わる。私たちの祈りの基本は、神を王として賛美することにある。主イエス・キリストが王であるので、私たちの祈りを聞いてくださると信じて、祈ることができるのである。

天の民、主イエス・キリストの花嫁

御国の王となってくださった主イエス・キリストは私たちに祈りを教え、私たちが贖われた者たちとしてケルビムや、長老、御使いたちと一緒に大声で賛美することを求めておられる。このように大声で賛美することによって、自分たちが天の民の一員、大きなラッパのような音をだされる神(黙1:10, 4:1)の似姿であることを表す。また聖くされた主イエス・キリストの花嫁(黙19:6-8)として、主イエス・キリストと一心同体であることを表す。賛美は神と私たちの契約関係を表すものなのである。

4. 新しい歌

新しい歌とは何か

聖書にでてくる神への賛美の中で、特別に目立つのは「新しい歌」である。「新しい歌」は、詩篇に6箇所、イザヤ書に1箇所、ヨハネの黙示録に2箇所の、合わせて9箇所にしかないが、重要な箇所にでてくる。では、新しい歌を歌えと言われた時に何を歌うのか。何が「新しい」のか。他の詩篇や、賛美と何が違うのか。

詩篇33篇

最初に、「新しい歌」が歌われている箇所は、詩篇33篇である。

「正しい者たち。主にあって、喜び歌え。賛美は心の直ぐな人たちにふさわしい。立琴をもって主に感謝せよ。十弦の琴をもって、ほめ歌を歌え。新しい歌を主に向かって歌え。喜びの叫びとともに、巧みに弦をかき鳴らせ。」(詩33:1-3)

この詩篇では、主の恵みによってなされた、創造のみわざと、支配について賛美している。正しい者たちは、全世界を創造された主を、立琴と十弦の琴を使って賛美しなければならない。「新しい歌」は、全能なる神がなさってください創造と、救いをほめたたえる歌なのである。

詩篇40篇

40篇は、穴の中から救われたことへの感謝である。主が、ご自分に信頼する者を、助けてくださったことを歌っているが、自分ひとりではなく、「大きな会衆の中で」(詩40:7) 歌うということが、この詩篇の特徴である。個人に救いが与えられるとは、「巻き物の書」(詩40:9) に書かれている契約の民に、救いが与えられるということであるので、民全体も一緒に歌うのである。

詩篇96篇、98篇

詩篇の第4巻のテーマは、「主は王」(詩93:1, 95:3, 96:10, 97:1, 98:6, 99:1) だということである。その中心にある詩篇は、「新しい歌を主に歌え」(詩96:1, 98:1) という呼びかけから始まる96篇と98篇である。96篇では、主の、神の神としてのみわざと、王の王としてのさばきについて感謝している。98篇では、主の義しいさばきによる勝利を喜んで、「新しい歌を主に歌う」ということは、「主は王である」と賛美することなのである。

第1歴代誌16章

96篇は、ダビデが、契約の箱をダビデの町に運び、その中心に据えた時の賛美の一部と同じである。ダビデは、イスラエルの中心から離れていた契約の箱を運び込む時に、「十弦の琴や、立琴などの楽器を携え…シンバルを響かせた。」(I歴16:5) この箇所は、ダビデの制定した、レビ人による賛美の制度の始まりである(注1)。レビ人たちが、詩篇第4巻の一部を使って、「主に感謝せよ。主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこ

しえまで」(I歴16:34)と主をほめたたえたことは、主の御座である契約の箱が、運び込まれる時の歌にふさわしい。それは、ダビデが、契約の箱を自分の町の中心に置くことによって、「主は王である」(I歴16:31)ことを告白しているからである。この時から、王の王に任命されたイスラエルの王、ダビデによる新しい時代が始まったのである。

詩篇144篇

144篇で感謝しているのは、神が「わが岩である主。…私の恵み、私のとりで。私のやぐら、私を救う方。私の盾、私の身の避け所。私の民を私に服させる方。」(詩144:1, 2)として、国々に対して勝利し、「神のしもべダビデを、悪の剣から解放される」(詩144:10)からである。さらに神は、人が何かを知っておられるので、イスラエルの民の神として祝福も与えてくださる。神がご自分の民を祝福されることは、神の恵みによる。

詩篇149篇

この詩篇は、主にあって復讐をする詩篇である。聖徒たちは、「誉れ」(詩149:9)として「書き記されたさばき」(詩149:9)を行う。その者たちの口には、「もろ刃の剣」(詩篇149:6)と共に、「神への称赞」(詩149:6)がある。聖徒たちは、自分たちで戦っているのではなく、「造り主、王」(詩149:2)と一緒に戦っているので、新しい歌を賛美しなければならない。神は、王として敵に対して復讐し、新しい時代の到来を宣言してくださるのである。

イザヤ書42章

主イエス・キリストが来てさばきをなさる時に、「海に下る者、そこを渡るすべての者、島々とそこに住む者よ。荒野とその町々、ケダル人の住む村々」は、「主に向かって新しい歌を歌え」(イザ42:10, 11)と命じられる。この預言の最初で、主イエス・キリストが弱い者を守ってください、義なるさばきを行ってくださいと言われている。主は、偶像とは違うので、盲人などを救い、やみから救ってください。イスラエル人以外の者たちも、新しい歌をもって主をほめたたえるのは、主イエス・キリストによって、救いが全世界にもたらされ、王としてのさばきとなされるからである。

注1 第1歴代誌16:8-36には3つの詩篇が埋め込まれている。主がアブラハムに与えられた契約を守り、アブラハムを国々の中で守ってくださったことをほめたたえる8-22は、詩篇105:1-15と同じである。23-33は新しい歌を神の神、王の王に歌う詩篇96:1b-13, 34-36は「主に感謝せよ。主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで。」で始まり、救いを求める祈りと、イスラエルの神の賛美で終わる詩篇106:1と47-48である。他にもダビデの歌が、詩篇と同じであるという例は第2サムエル記22章と詩篇18篇である。

ヨハネの黙示録5章

ヨハネの黙示録では、ダニエル書で封印された巻物が、ほふられた小羊によって解かれる時に、24人の長老、4つの生き物、さらに御使い、全被造物までも賛美した。最初に、長老とケルビムが歌った賛美は、新しい歌で、賛美の歌詞が書かれている。「あなたは、巻き物を受け取って、その封印を解くのにふさわしい方です。あなたは、ほふられて、その血により、あらゆる部族、国語、民族、国民の中から、神のために人々を贖い、私たちの神のために、この人々を王国とし、祭司とされました。彼らは地上を治めるのです。」(黙5:9, 10)ここで歌われているのは、小羊が血によって贖いをし、贖った人々を、王、祭司としてくださるということである。民が、王、そして祭司となるということには、小羊が、王の王、大祭司となることが含まれている。新しい王、大祭司が来る時に新しい時代が始まるのである(注2)。

ヨハネの黙示録14章

王であり、祭司である贖われた人たちも、新しい歌を歌う。小羊は、144000人の人たちを初穂として贖い、ご自分と共にいる者たちとされた。彼らは、新しい歌を歌っていたが、「地上から贖われた144000人のほかに、だれもこの歌を学ぶことができなかった。」(黙14:3)その者たちは、賛美をする時に、叫んでいたので、「大水の音のようで、また、激しい雷鳴のようであった。また、私の聞いたその声は、立琴をひく人々が立琴をかき鳴らしている音のようでもあった。」(黙14:2)

モーセの歌と小羊の歌 (ヨハネの黙示録15:3-4)

直接は書かれていないが、モーセの歌と小羊の歌も新しい歌である。モーセの歌とは、イスラエルの民が紅海を渡った時の賛美である(出15章)。古いモーセの歌の中で賛美されているのは、主がエジプトの軍に対して勝利をしてくださったこと、続けて民を相続地にまで導いてくださること、それによって「主はとこしえまでも王である」(注3)ことが明らかにされることである。モーセと小羊の歌で歌われているのは、主が聖なる王として義なるさばきを行われたので、全世界は礼拝するということである。モーセの歌は、イスラエルの民の新しい出発の時に歌われたが、ヨハネの黙示録では、主イエス・キリストの支配による新しい時代が始まる時に賛美されるのである。

新しい歌と楽器

新しい歌と楽器には深い関係がある。詩篇で、新しい歌を歌うように命じられている箇所や、ダビデが契約の箱を運び込んだストーリー、ヨハネの黙示録での賛美では、シンバル、琴などの楽器を使って賛美する。新しい歌は、神が王となられたことを賛美する歌であるので、神の発せられる音に似た音を使い、また、神が契約を与えてくださる時の音を真似して賛美するのである。

新しい時代の歌

このように「新しい歌」という言い方がでてくる箇所や、新しいモーセの歌を見てくると分かるのは、新しい歌が、ただの「新曲」ではなく、主を王として賛美する「新しい時代の歌」だということである。これが賛美されるのは、新しい契約が始まる時であった。ダビデの時代に、主はダビデの子孫を永遠に王座に着かせてくださる、という契約を結んでくださった。その契約を守ってくださった神は、主イエス・キリストをダビデの王座に着け、全世界をさばいて、贖ってくださったのである。主イエス・キリストは、ダビデのよう戦い、さらに弱い者、貧しい者を贖ってくださるのである。これが本物の義なる王の行うことであり、ご自分の契約を守ってくださる王の王がなさることである。敵をさばき、民を贖い、王座に着座されることによって新しい時代が始まる。

ヨハネの黙示録全体は、まさにこの要素が含まれている書物である。主イエス・キリストが、神の右の座に着いて贖いをされることを、ケルビム、民は大声で賛美するのである。主イエス・キリストは、御父の右の座に着いて、永遠にご自分の民を導いてくださるので、私たちは、王座の周りにいる御使いと同じように、天の民として新しい歌を常に賛美していなければならない。

注2 イスラエルにおいて、大祭司が死に、次の祭司が大祭司となるということには、特別な意味があった。民数記35章には、誤って人を殺してしまった者のための、逃れの町についての命令がある。間違っただけで殺人をしてしまった人は、復讐者から逃れるために、そこに入るが、大祭司が死ぬとそこから解放される。

注3 出エジプト記15:19。新改訳では「統べ治める」という言い方になっているが、他の「主は王である」という言い方と同じヘブライ語である。

5. 主の恵みはとこしえまで

「主の恵みはとこしえまで。」とはどのような歌か

「主に感謝せよ。主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで。」(詩107:1)

この言い方で詩篇の第5巻は始まる。また聖書の中のいくつかの箇所には賛美の言い方としてでてくる。では、これはどのような意味なのだろうか。またどのような時、どのような時代に歌われる歌なのだろうか。

直接、または短くした言い方は全部で41箇所に出てくる。しかし、第1歴代誌16章など、136篇などのようにまとまって使われている箇所がいくつかある。また、直接この言い方はでてなくても、恵みがとこしえであること、主がいつくしみふかいことなどを賛美している箇所はたくさんある。

第1歴代誌16章

最初に「主の恵みはとこしえまで」と賛美している箇所は、楽器について、また新しい歌について考える時にも重要な第1歴代誌16章である。ダビデはレビ人を任命し、契約の箱と呼ばれている主の御座を、国の中心であるダビデの町に持ってくる。そこでは、主のみわざ、つまり、全世界を創造されたこと、地をさばかれること、ご自分の契約を覚えて、私たちに救ってくださることなどが歌われている。その長い歌をまとめると、レビ人の中で選ばれた者たちがが歌っているように「まことに主の恵みは、とこしえまで」という言い方になる(1歴16:41)。

ソロモンの神殿奉獻

この賛美はソロモンが神殿を奉獻した時にも歌われる。ソロモンが主の宮とその器具を作り終えた時、ダビデの町にある天幕に安置されていた契約の箱を運び込む(II歴5章)。それを至聖所にあるケルビムの翼の下においた時、「ラッパを吹き鳴らす者、歌うたいたちが、まるでひとりでもあるかのように一致して歌声を響かせ、主を賛美し、ほめたたえ」(II歴5:13)、「主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで」と賛美する。その賛美に答えるかのように、主の栄光の雲は神の宮を満たした。ソロモンが神殿奉獻の祈りをし、天で祈りを聞いてくださることを願ったあと、民全体も同じように「主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで」(II歴7:3)と歌う。

この箇所興味深いことは、ダビデが賛美の制度を決めた時に、楽器を作ったが、それらは「主の恵みはとこしえまで」ということを賛美するためであったということである。ダビデは、この歌を賛美するため専用の楽器として、琴などを作ったのである(II歴7:6)。

ヨシャパテの賛美

ソロモンの子孫であるユダの王ヨシャパテもこの賛美をしたことが記されている。歴代誌にはヨシャパテの

やったことについてたくさんの方が書かれている。ダビデの道に歩み、偶像を取り除いたヨシャパテは主によって守られ、祝福され、ユダの町々で律法を教えるようにレビ人たちに命令した(II歴17章)。アハブ、アハズヤと契約を結ぶという悪も行ってしまったが(II歴18章)、アモン人によって攻撃された時には主のみに信頼し、祈って助けを求める。主が戦ってくださるという答えを受けたヨシャパテは軍の先頭に歌うたいを立て、「主に感謝せよ。その恵みはとこしえまで」と楽器を使って賛美させた。そしてその戦いに勝利した。ヒゼキヤ、ヨシャなどはダビデとソロモンのあとで忠実な王として有名であり、長い間守られていなかった祭りをしたが、その人たちではなく、ヨシャパテがこの歌を賛美させたことと記録されていること、またその賛美を戦争の時に歌わせたことは興味深い。

エズラの時代の神殿定礎

イスラエルの民がバビロンに捕囚となった時に神殿は完全に破壊され、その中にあった用具はすべて取り去られた(II歴36章)。それでも主はご自分の民を預言してくださった通りにカナンに地に戻し、エズラ、ゼルバベル、ネヘミヤをリーダーとしてイスラエルを再建してくださる。その時に神殿も建て直す。定礎の時に民は大声で「主はいつくしみ深い。その恵みはとこしえまでもイスラエルに。」と賛美する(エズ3:11)。その声はとて大きかったために遠い所でも賛美が聞こえるほどであった。

エレミヤの預言

バビロンから連れ戻された時にはこの賛美をするようになるということは、エレミヤが監視の庭に閉じこめられていた時に主から預言されていたことであった(エレ33:11)。主は廃墟となった町を再建し、ダビデの王座に王を尽かせ、契約を守ってもらう一度賛美で満ちあふれるようにすると誓われた。

詩篇の賛美

詩篇の中にも何箇所かこの賛美はある。民が主のみことばに逆らい、葦の海や、荒野で悪を行い、偶像礼拝をしたことが記録されている第4巻の最後の詩篇、106篇は「ハレルヤ。主に感謝せよ。主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで。」という言い方で始まる。第5巻の始まりである107篇も同じ言い方で始まり、主の恵みを感謝する賛美が繰り返される。118篇は「主の恵みはとこしえまで」で挟まれている。最初に「主の恵みはとこしえまで」と賛美するように命じる。それは主に信頼することによって敵に対して勝利を収めたからであり、それによって祭壇の所に行って主を礼拝する。136篇は主の創造、救いのみわざを思い出し、「その恵みはとこしえまで」ということを26回繰り返す詩篇である。

新約聖書の手紙の挨拶

教会、働き人などへのパウロの手紙や、ペテロ、ユダの書いた手紙のほとんどの挨拶には「恵みと平安があ

るように」という言い方がある。この言い方はイエスこそキリストであることを賛美する言い方であり、主イエス・キリストのために戦っている教会を励ます言い方でもある。

ヨハネの黙示録での賛美

「主の恵みはとこしえまで」という言い方はヨハネの黙示録には直接でてくることはないが、たくさんの賛美の内容はすべて「主に感謝せよ。主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで。」という言い方でまとめることができる。さらにそれをまとめるなら、「主イエスの恵みがすべての者とともにあるように。」という言い方になり、最後の「アーメン」という言葉になるのである(黙22:21)。

主は必ず契約を守り、ご自分のみことばに忠実に、王座である契約の箱に着いてさばきをなしてください。またこれからも続けて守ってくださることを「主に感謝せよ。主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで。」という言い方で賛美する。この言い方を短くするなら、「ハレルヤ」となり、詩篇の中で何度も使われている賛美への招きの言い方となるのである。

あとがき

この論文を書くにあたって、特に参考にした文献はないが、契約についての考え方はラルフ・A・スミス氏に、象徴についての考え方はジェームス・B・ジョーダン氏に、ひな形によるストーリー解釈はピーター・J・ライトハートに影響された。またこれを書いている間、いつも支えてくれた家族に感謝する。特に12年前から詩篇を教え、この論文の考案、内容、校正、レイアウトなどのすべてにおいて多大な労力を費やしてくれた父に感謝する。この論文が、ひとりでも多くのクリスチャンへの励ましとなることを願ってやまない。

主よ、私たちにいつくしみ深くしてください、その恵みが永遠に私たちとと共にあるように。アーメン。

2006年2月
菅野契也